



## 筑波 —この不思議なまち—

前野哲博  
臨床医学系講師

雑木林や小川に囲まれたのどかな農村地帯の中にある集落には、白塗りの壁、立派な門構えを備えた瓦葺きの大きな家が並んでいる。まるで時代劇に出てきそうな古いたたずまいをみせる街並みである。ところがふと眼を転ずると、通りを挟んだ反対側には、広大な敷地に近代的な研究所、どこまでもまっすぐな道路、整備された街路樹、学生の住む雑多なアパートがある——これが典型的な筑波のまちである。全く性格の異なる二つのエリアが隣り合わせに存在しているのは、古くからの農村地帯に突然計画的な近代都市が作られたため、おそらく全国にも例を見ない筑波独特の風情である。



私が初めて筑波に来たのは、医学専門学群に入学した昭和60年であった。ちょうど科学万博が開かれた年で、街づくりが急ピッチで進み、百貨店の進出などで大いににぎわった年である。東京から来

た同級生は「筑波は何もないところだ」と嘆いていたが、九州の片田舎出身で、セブンイレブンがコンビニの名前であることも知らなかった私にとっては十分便利な「都会」であった。それよりも、計画的に整備された街並みと、自転車でもどこまでも行けるペDESTリアンに驚き、大いに感動したものであった。この頃は、車で裏道を通る時以外はほとんど研究学園都市の中だけで生活していて、昔ながらの地区に住む人々と触れあう機会もなかったため、その存在を意識することもなく、いわゆる別世界で暮らしていたと言っていだらう。

卒業してすぐ筑波を離れて東京の病院で初期研修を受け、3年後に筑波に戻って大学病院の総合医コースというところで後期研修を受けたが、その時も主に病院の中で研修していたため、仕事で接するのは病院に入院している患者か外来に通ってくる患者ばかりであった。



筑波というまちのもつ二つの顔を強く意識するようになったのは、後期研修を終え、つくば市にある病院の総合診療科に勤務するようになってからである。総合診療とは、臓器別に高度専門化した医療とは一線を画し、患者の抱える健康問題に対して、どんなことでも幅広く対応することが大きな目的の一つであり、地域に根ざしたケア、特に在宅ケアは重要な仕事である。私も、病院でベッドに横になっている患者だけではなく、家族と暮らしている普通の姿や住んでいる家を通して、ちょっと大げさかもしれないが、患者の背景にある人生を感じることでできる往診が大好きで、当時は月に10件以上の訪問診療をこなしていた。残念ながら、一年ほど前に大学に移ってから往診は出来なくなってしまったが、大学病院で日頃診ている患者にも、背景にこのような歴史があることを知ることで、より深く患者のことを理解できるようになったと思う。

話が横道にそれてしまったが、往診する患者はほとんど高齢者で、昔から筑波に住む人々である。そこで、これまで外から眺めるだけだった古くからの家の中に入る機会を得るようになったわけだが、たいていの家では、屋根のついた立派な門をくぐると、古い瓦葺きの大きな

母屋と、その向かいに納屋がある。車が余裕でターンできるくらいの広い庭と物干し竿があり、外にトイレがあることが多い。家によっては、お稲荷さんがあったり、古い井戸があったりすることもある。家の中に入り、恐ろしく高い敷居をまたぐと、広い縁側と畳の部屋が続く。薄暗い段差だらけの狭い廊下を通ると、日当たりの良い南向きの部屋にベッドがおいてあって患者が寝ているというのが一般的な光景であった。全く使っていない部屋がいくつもある家も多く、狭いアパート暮らしに慣れていて私にとっては、うらやましい限りの空間であった。

これまで往診した中には明治2年に建てたという家（築132年！）があって、70歳になる患者さんはもちろん、そのお祖父さんも同じ家で生まれたとのことであった。診察している脇では、むかし患者さんが使っていた机を使って小学生の孫が宿題をやっていた。その患者さんは不幸にして亡くなってしまわれたが、一世紀以上もその家族を見守ってきた家を訪問するたび、人が生まれ、育ち、そして次の世代にバトンを渡して死んでいくという、大昔から連続と続く家族という絆を感じずにはいられなかった。

ところが、患者の家を後にすると、その余韻もさめやらぬうちに、筑波のまちはい

きなり計画的に整備された近代的都市へと表情を変える。最初はなかなか気持ちを切り換えることが出来ずに、頭がくらくらするような戸惑いを覚えたものだが、そのうちにそのギャップがタイムトンネルをくぐるような楽しさになり、往診が一層楽しくなったものだった。



私の6歳と3歳の2人の子供の通っている保育園は、大学病院から車でわずか数分の距離にありながら、遠くに筑波山を望み、近くに小川が流れる田圃に囲まれたのどかな場所にある。ここで、子供たちは毎日のように遠足に出かけ、カブトムシ、トンボ、ザリガニ、バッタなどを捕まえたり、木登りやドングリ拾いをしたりして、自然の中で遊びを覚える。そして春になるとタケノコ取りに出かけ、夏には沢ガニを捕まえてくるなど、筑波をめぐる四季を体いっぱいを感じながら遊んでいる。そういえば以前、穴があいているので手を突っ込んでみたらモグラが出てきたという話を聞いた。



筑波は、整備された道路、公園、充実してきた百貨店や電気街、日帰りで東京にも行ける、そういった近代的生活の恩恵を享受できる一方で、一歩外へ踏み出すだけでいわゆる里山といわれる自然が

そのまま残っており、人情あふれる古くからの人々の生活が息づいている不思議なまちである。最近、日本人の原点ともいえるべき、豊かな自然と、地縁・血縁を中心としたコミュニティの中での人間らしい生活が消えて久しいといわれる。その代償として、現代人は快適な生活環境と近代的な便利さを手に入れたのであるが、筑波はそのどちらかを失うことなく、両方を同時に味わえる、夢のような贅沢な場所だと思う。研究学園都市に住みながら、豊かな自然と昔ながらの暮らしの中で毎日暗くなるまで楽しく遊んでいる子供たちは、私にとって全くうらやましい限りである。

研究学園都市に住む人々は、その中で生活していても日常生活に困ることはほとんどないし、ともすれば自分たちの世界だけに目を向けがちである。しかし、私から見れば、それは筑波のまちを半分しか見ていないようで、実にもったいないと思う。是非一度、思い切ってその境界を踏み出してほしい。そして、タイムトンネルを抜ける感覚と、その向こうに広がる世界を満喫していただきたいと思う。きっと、研究学園都市での日常生活の中で忘れかけていた何かを思い出すことができるだろう。

(まえのてつひろ 卒後臨床研修部)